

青の時代

三島由紀夫

だい じ の 時 代
あお 青



定價はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 50 T

昭和四十六年七月十五日 発行
昭和五十三年八月十五日 十五刷

著 者 三島 由紀夫
（みしま ゆきお）

発行者 佐藤 亮一
（さとう りやういち）

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社
© Yôko Hiraoka 1971

製本・憲專堂製本株式会社
Printed in Japan

新潮文庫

青の時代

三島由紀夫著

新潮社版

序

「小説の前に、型のごとき作者と友人の対話がついているとは古風だね」

「そうだよ。われわれはどっちみち少しばかり古風であることを免かれないんだ」

「ところで今度の新作の主人公にはモデルがあるのかい」

「あるともさ。例の光クラブの山崎晃嗣さ」

「そのモデルを餌にして、君のこねまわす一ト理窟はどういうのだい」

「僕は疑わない人間の物語を書くつもりだよ。それが実に扱いにくい主題だということは、こういうわけだ。全てを疑えば哲学者になって書齋に引き籠れるし、全てを疑わなければ下積の幸福が味わえる。ところがこの主人公は自分で疑う範囲を限定しておいて、それだけを疑うのだ。従って彼の行動は青写真の範囲を決して出ないし、青写真を破ることもできず、そうかと言って、青写真の作製をやめることもできないのだ。しかしたとえば、彼は真理や大学の権威を疑っていない。疑わない範囲では、彼はしばしば自分でも気のつかない卑俗さを露呈する。ところが滑稽なことは、疑わない範囲の彼の卑俗さが、疑っている範囲の彼のヒロイックな行動に、少なからず利しているかもしれない点だ。マキャベリを攻撃する彼自身が、こうして無意識のマキャベリ

になつてしまふ。むしろ青年が純粹を守ろうと思つたら、徹底的にマキャベリの響みに倣うほう
が、賢明な道かもしれない。とはいえ勿論、賢明な道が最善の道ではないが……」

「一体君は諷刺画を画くつもりかい。それとも英雄物語を書くつもりかい。この二つは両立しな
い筈だがね」

「そうだね。僕の書きたいのは實物の行動の小説なんだ。まじめな實物の英雄譚なんだ。人は行
動するごとく認識すべきであつても、認識するごとく行動すべきではないとすれば、わが主人公
は認識の私生児だね」

「それを君が認知してやるというわけかい」

「いや、それはまだわからない」

青 の 時 代

第一章

川崎誠かわさきまことは一九二三年千葉県千葉県のK市に生れた。一九二三年は大正十二年である。

K市に市制が布しかれたのは昭和十八年である。千葉県の南西に位して、東京湾を隔てて京浜地方と相對しているこの古い漁村は、瀬川せがわ如皐じよこうの「世話情浮名横櫛よわなさけうきなのおこぐし」の見染めの場で名高いように、江戸末期から都人士とじんしの遊樂の地であった。昭和七、八年ごろ、小櫃川おびつがわの下流一帯に浚渫しゅんせつ工事ははじめられ、飛行場が設けられるにいたった。その後のK市はむしろ海軍航空隊の根拠地として名高くなった。K町に市制が布かれたのはこのおかげである。

K市は由来低能児の多い町である。その昔「淫風いんふう甚はなはだし」という有難いレッテルが貼はられたことの、遺伝学的な結果かもわからない。ひとり川崎家の一族が、血統においても、知能においても、道德的潔癖けつへきにおいても、これら群雞ぐんけいの中の一鶴いっかくだった。

われわれの祖父の時代には、知識と道德とは当然同一人のなかに住むものと見られていた。こういう信仰が、いまだに地方によっては残っているのを見ることができる。誠の父の川崎毅つよしは、生き残っている古い信仰のおかげで生き永らえている最終の神である。この古い神は十分立派な存在であるし、安心してよいことに、当分死にそうもない。誠の祖父はK市近郊きんきょうの左貫藩さぬきはんの藩医

の出である。毅は父業を継いだのである。

どういふ形にもあれ、知的卓越というものは、或る種の衰弱を免かれがたいもので、それが道徳の自然な漆喰で固められた毅の場合はしばらく措き、この低能な小都会から抜ん出た一家の優秀さが、実験用に作られた植物的変種のように見られがちであったことは、落第坊主ばかり三人も抱えて弱っている網元の父親が、川崎夫妻は頭のよい子供を作るために独乙から密輸された或る極秘の煎じ薬を飲んだというまことしやかな噂を流布したことでとも知れるのだが、それかあらぬか、三男の誠が育つにつれ、この子にはどことはなしに自然さが欠けているというかすかな懸念は、あんまり聡明ではない代りに直感には秀でた母親の人知れぬ悩みの種子になった。

川崎家はK市の南を流れる幅五六間の清冽な矢那川の下流に架った新田橋の橋詰にある。石の門と飾りけのない二階建の外観は、見るからに、酒一つ嗜まない家長の謹直さを偲ばせる。この家の唯一の面白味は、川に突き出したヴェランダで居ながらにしてできる鯊釣であった。

泳ぎにゆくには、川沿いの道を伝わってまっすぐに行ける海岸は不適である。夏になると、しばしば毅は三人の息子をつれて鳥居崎海岸へ泳ぎに出かけた。町中をしばらく北へ行き、迂回して海へ出るのである。

小学校へ入るか入らぬかの或る夏の一日が誠の記憶にひとしお鮮やかに残っているが、水着とよばれる行者の着るような白麻の襦袢様のものを裸かの上に着せられて、彼は父や兄たちのあとから懸命に、時々駈けながら、せい一杯の歩度で歩いていた。兄たちは小さな末弟の手を引いて

やることはおろか、歩みを緩めてやることもしない。そんな情弱な愛情を示しては、穀のお叱りを蒙るに決っていた。

誠はいそぎながら買いつけの文房具店の前まで来た。その軒先に大きな鉛筆の模型がかかっている。

母親の言草はいつもこうだった。

「あれはだめ、あれは売物じゃありません。お前は舶来の鉛筆なんかを買ってもらえて本当に仕合せだと思わなけりやいけませんよ。いったい何が不足で、そんなすねた顔をするんだね、誠。天子様なんぞは実に御質素で、今もおぼえているが、春宮様でいらした時分、そのころいちばん安かった和製の驚印という鉛筆を使っていたらしいですよ」

誠がねだるたびに、母親はますます難渋し、店員たちはますます笑った。

煙突ほどもある太さの六角の鉛筆は、糸で吊られていたために、風をうけると、立体六角形に細まった先が黒く塗られている芯の部分に軸にして、緑いろの光沢紙を貼った六つの側面のまばゆい金文字を誇示しながら、廻りつづけた。

——彼の小さな下駄の足は、先をいそごうと思っても、その鉛筆の前で止ってしまふ。

『売物ではない。そんな口実を誰があ鉛筆に与えたのだろう。どうしてあの鉛筆が僕のものにならないのだろう。あの鉛筆と僕との間に在って、邪魔をしているものは一体何だろう』

母親が案じている自然さの欠如はこんな考え方にもあらわれていたが、それが一面、欲しいも

のなら大概買ってもらえる子供の我儘に他ならないにしても、誠が他の子供とちがっていた点は、手に入れてから遊ぶのが目的で玩具の電気機関車をほしがるのと相違して、ボール紙細工の模型にすぎない大きな鉛筆を、目的もなくほしがっていた点である。念のために断っておくが、誠は決して詩人くさい子供ではなかった。

二番目の兄は見かねて引返して来ると、彼の手を強く引いて、耳もとで囁いた。
「何をしてるんだ。お父様に叱られるよ」

誠はつぶらな目をあげた。この子にはとり立てて愛らしいところも美しいところもなく、むしろ肉の薄い鼻梁の高さ加減が、子供らしさを失わせていたが、瞳だけは濁りのない底知れないほど明澄な黒さを持っていた。それさえも子供には不似合のものの一つだったかもしれない。世間並の子供はもっと睡たそうな目をしているものだ。

この兄の忠告は遅きに失した。父親は戻って来た。立ちほだかっている毅の麦藁帽子の蔭になつてゐる顔は、炎天の街路の反射に照らし出されて、暗澹と、怖ろしげに見えた。毅は帽子の紐を顎のところで見帳面に花結びに結んでいる。その結び目の長さも左右が寸分ちがわなない。

「誠。どうした」

誠は答えることができない。膝頭が小刻みにふるえている。冷酷な長兄が、引取って、遠慮会釈もなく説明した。

「こいつ、この広告の鉛筆がほしいと言って、いつもお母様を困らせているんですよ」

ここで意外なことが起った、というのは、誠の顔も見ないで黙っていた毅は、つと店の中へ歩み入って、「売物でない」鉛筆を譲ってもらふ交渉を店の主人に持ちかけたのである。土地の名望家が直々の申出なので、主人は二つ返事で承諾した。幾何の金が支払われ、巨大な鉛筆は店員の手で賑やかに軒先から外されて、この思いがけない幸運の到来に面喰っている子供の両腕へ託された。

誠は抱えた鉛筆のかげから父と二人の兄の顔を見比べたが、兄たちは誠自身よりもっと目を丸くして驚いているし、父は父で、不機嫌そうにそっぽを向いていた。毅の在り来りな愛情の逆説には、子供心にも馴れている誠なので、そのままお礼を言っただけ家へかえろうとしていると、どうやら様子が変である。水着と下駄と麦藁帽子のいでたちの父親は、柔道三段の短軀の背を向けて、何事もなかったように又歩き出した。このいでたちを小型にしただけの二人の息子もこれに従った。さらに小型にしただけの末弟は、いやでも大きな張子の鉛筆を抱えたまま、後について行かねばならない。幾瞬間か前まですなおに父性愛に感激して、それを母性愛より高値に評価した六つか七つの子供が、この評価の修正について算盤を弾きかかる深刻な顔つきを想像してみるがいい。

『どうするつもりだろう。海までこれをもって行かなければならないのかしら』
次第にこの幸運はかよい子供の膂力に余った。

海の方角には魁偉な夏雲がわだかまっている。日中の町は静まり返って人通りがすくない。こ

んな田舎町でも、そのころの呉服屋は、屋号を染めだした紺のれんに石を繋ぎ、深々と藍いろの影を路上にさしのべていた。燕が礫のように飛び交わしている。人通りがすくないと言っても目貫の通りの行人の悉くが、敬意をこめて穀に目礼してすぎるので、この水着の一行はたえず会釈を返さなければならなかった。ゆきすぎる人の一人一人が、小さな誠が抱えている身に余る鉛筆の化物に、愕いては頬笑んでゆく。なかには親切な消息通がいて、坊ちゃん望みが叶ってうれしいね、などと声をかける。誠は重さに倒れそうになりながら、その上、兄たちの歩調に合わせて、ときどき小走りに駆けなければならぬ。海岸へつく。あいかわらず洗面を作って黙っている穀からサイダーを振舞われると、彼はあわてて飲み下して大そうむせた。

K町の人たちは水練が達者である。まず泳げない人はないと言っている。嘘のような話だが、K町出身の或る米屋が、東京の芝に出した店をつぶしてしまい、夜逃げをする羽目になった。彼は残った全財産の風呂敷包を頭に結びつけ、東京湾を突っ切ってK町へ泳ぎかえったということだ。

誠の泳ぎは父を齒がゆくさせるほど進歩がおそかったが、それに比べると万事に単純な二人の兄は早くから上達していた。早速泳ぐのかと思っていると、穀は小舟を傭って、二人の兄と、後生大事に鉛筆を抱えている誠とを、波打際から大声で招いた。

舟が沖へ出ると、はじめてこの蟹のように頑固な父親が口をきいた。

「わかったか、誠。ほしいものがあっても、男は我慢をせなけりやならん。我慢をせんと、今み

たような辛^{つら}いことになる。どうだ。辛^{つら}かったら、それがわかったら、もうこの鉛筆の化物は要^いらんだらう。海へ捨てておしまいなさい」

こんな譬^{たと}え話^{はなし}風な教訓は、ひとつには毅^いの古風めかしたダンディズムであつたが、そんなことが子供に通じよう筈^{はず}はない。誠は拒否の身振で、体^{からだ}じゅうで鉛筆を抱きしめた。それは子供の必死の力に責められてみしみし言った。父親が兄に合図をしたので、この忠実な手下は、小さな弟の体を鉛筆ごと胴^け上げにして海へ投げ込む氣振^{けぶり}を見せた。恐怖のあまり、誠は鉛筆を手から離した。

父親は小舟を岸へ返した。二人の兄も半ば昂奮^{こうふん}した、半ば白けた面持で黙っている。誠は鱷^{もも}のところ^{ところ}に柔らかい顎^{あご}を乗せ、波間に遠ざかつてゆく鉛筆を見送った。体が悲しみのために溶^{とろ}けそう^{そう}で、その重苦しい倦^{だる}さは、到底体を真直^{まっす}ぐに保たせない。

「体を真直ぐに！ 体を真直ぐに！」

この父親の口癖^{くぐ}をきくように思ったのは耳のせいで、毅^いも依怙^{いこじ}地に黙ったまま權^かを動かしてゐる。

張子の鉛筆は、海に落ちたその当座は沈んでゆきそうに思われたが、須臾^{しゅゆ}にして浮き上り、その緑の光沢紙と金文字の側面を、潮^{うしほ}のふくらみと動揺のあいだに隠顯させた。海岸の海水浴の人たちの顔が見わけられるところまで来ると、ひとたび誠の手に委^{ゆた}ねられ、又たちまち彼の手をのがれ去ったこの氣紛^{きまぐ}れな宝物は、すでに視界の外に没した。

——これが毅の教育法であつた。彼は十分その男性的な克己を教えた教育上の効果に満足して
いたし、可愛^{かわい}い息子の教育のために文房具屋に支払った無駄金は、自分が吝^{けち}な父親ではないとい
う自己証明で彼をいたく満足させた。

誠の記憶に残っている最初の新聞紙上の大事件は、(何故^{なぜ}かというと、東京に起る事件はK市
では新聞の紙面以外にはみ出して来ることはまずなかったから)、昭和五年の浜口首相狙撃^{そげき}事件
である。翌六年の満洲事変、七年の五・一五事件までは、まだはつきりした関心の対象になつて
いない。

昭和十一年の二・二六事件は、すでにしてK中学の一年生であつたことと、たまたま幼年学校
の入学試験を落ちて同年級に編入されてきた遠縁^{えんし}の易^{やすし}が大いに叛乱^{はんらん}軍に共鳴して彼に英雄主義を
吹き込んだのとで、忘れがたい事件である。

あの不手際^{ふてぎわ}なクーデタが当時の少年に及ぼした精神的影響について世間で何とも言われていな
いのは遺憾なことだ。少年たちがあの事件から教わつたのは、挫折^{さくさつ}という観念なのである。学校
でも教えてくれなければ家庭でも教えてくれなかったこの新鮮な観念から、易は感傷的な英雄主
義をでっち上げた。

感傷というものが女性的な特質のように考えられているのは明らかに誤解である。感傷的とい
うことは男性的ということなのだ。それは単純で荒削りな男が自分の心に無意識に施す粉黛^{ふんたい}であ

る。単純だと思われることの大きらいな男が、センチメンタルだと言われて、いかに憤慨するか見るがいい。

誠は易のようにには自分に感傷という縞柄しまがらが似合わないことをうすうす感じていた。

『感傷的でない英雄主義というものはないかしら』

と彼は考えた。事態を明晰めいせきに見きわめること、決して挫折ざせつしないこと、そういう特質は英雄主義と相容あひいれないものであろうか。

第二章

中学一年生のあやふやな発明にかかるこの英雄主義には、どこやらに脅やかされた影が感じられ、しかも他ほかならぬその影の使喚しきわんのおかげででっち上げられたようなものがあつたが、実をいうと、この英雄という概念は、集団の中から学び取られた個人主義にすぎなかった。

こんな御談義は後年の誠が得意とした口調に似ているが、正常な状態にある社会から人が個人主義を学ぶように、それを学ぶ前に異常な社会からは少年はまず英雄主義を学ぶのである。社会の振幅の増大が、というよりはその痙攣けいれんが、個人主義の振幅を増し、個人主義に痙攣をおこさせる。ここにいたって、英雄主義は、自己防衛のために鎧よろいを着た個人主義であり、叫んでいる社会に対抗する演説口調の個人主義である。一九三〇年代に育った少年たちがこのためにすっかり声